

う。

〔モンゼット並びにアソジン水和剤の穂ばらみ期散布による影響〕 本農試圃場において、シロガネ（中晩）に対し8月3日（穂ばらみ期）にアソジン及びモンゼット水和剤各濃度のものを10a当り180lの大量を背負式

全自動噴霧器で散布した。供試稲の田植えは5月25日、出穂期は8月12日～8月21日、刈取期は9月30日。区制は9区2連制、面積1区 $1/30$ aである。この結果は第5表に掲げる通りである。

第5表 有機砒素剤の散布濃度と薬害との関係（その1）

区	調査項目 ブロック	精 粉 重 kg				重 gr				薬 重 kg			
		I	II	AV	百分比	I	II	AV	百分比	I	II	AV	百分比
1	モンゼット×250	0.205	0.216	0.211	9.3	43	51	47	313.3	4.015	4.200	4.108	172.0
2	〃 ×500	0.738	0.678	0.708	31.2	35	40	38	253.3	3.269	3.463	3.366	140.9
3	〃 ×1000	1.755	1.960	1.808	79.7	20	15	18	120.0	2.279	2.785	2.532	106.0
4	〃 ×2000	2.148	1.923	2.036	89.7	10	17	14	93.3	2.555	2.665	2.610	109.3
5	アソジン ×250	2.120	2.133	2.127	93.7	10	18	14	93.3	2.522	2.733	2.628	110.0
6	〃 ×500	2.243	2.397	2.320	102.2	13	10	12	80.0	2.455	2.800	2.628	110.0
7	〃 ×1000	2.228	2.512	2.370	104.5	22	6	14	93.3	2.395	2.908	2.654	111.1
8	〃 ×2000	2.186	2.387	2.287	100.8	8	9	14	93.3	2.298	2.637	2.453	102.7
9	無 散 布	2.063	2.475	2.629	100.0	10	20	15	100.0	2.274	2.504	2.389	100.0

（その2）

区	調査項目 ブロック	稈長 cm			穂長 cm			肉眼観察による薬害程度	
		I	II	AV	I	II	AV	葉	穂
1	モンゼット×250	72.6	75.2	73.9	19.0	19.7	19.4	+++	++++
2	〃 ×500	78.6	84.3	81.5	18.2	19.1	18.6	++	++++
3	〃 ×1000	82.4	88.7	85.5	19.0	18.9	18.9	+	±
4	〃 ×2000	85.2	90.4	88.3	18.5	19.1	18.8	-	±
5	アソジン ×250	86.1	93.5	89.8	18.8	18.6	18.7	+	±
6	〃 ×500	89.2	94.7	91.9	18.6	18.5	18.6	-	-
7	〃 ×1000	88.1	92.3	90.2	18.4	18.9	18.7	-	-
8	〃 ×2000	86.9	89.3	88.1	18.6	18.7	18.7	-	-
9	無 散 布	88.4	91.1	89.8	18.4	18.8	18.6	-	-

薬害に関する試験の結果、アソジン水和剤（薬害防止剤入り）は250倍の高濃度のものを除く外は、何れも薬害の恐れは認められなかつた。モンゼットの場合250倍、500倍の高濃度では肉眼的にも薬害が甚だしく、出穂は遅延し、遅発分けつが増加し、青立ち症状を呈した。穂

は出穂後間もなく褐変し、殆ど稔実せず、収量において著しい減収を示した。又モンゼット水和剤は2000倍の低濃度でも、散布時期によつては大量散布をするとかや減収する懸念がある。従つて穂ばらみ期以後の薬剤散布にあつて、モンゼットは濃度及び散布量に関し特に注意を払う必要がある。

摘 要 本報はイネモンガレ病に対するアソジンの効果を知ろうとして行つた試験成績の概要である。

1 本試験の結果アソジンはモンゼットとほぼ同程度の効果があり、且つ薬害の危険はモンゼットより少いと考えられる。

2 アソジンの使用濃度は水和剤で2000倍前後が適当と考えられるが、粉剤では成分0.25%のものが望ましい。成分0.15%の場合、散布回数を増す必要がある。

3 散布時期は目安として、一応発病率で10~20%に達した時として置きたい。

イネヒメハモグリバエ防除試験

稲 場 祐 二

（富山県立山農業改良事務所）

当地区山間山麓地域に於ては最近水稻早植栽培の普及に伴つて田植直後におけるイネヒメハモグリバエの発生が多くなり問題となつている。本種による被害は、その喰入初期には痕痕が小さくて目立たないのに中期から後期には急激な加害を現わすので、このことが防除適期の把握を困難にさせ、とかく防除が遅れがちとなりその結果として防除を行なつても期待できる効果が少なく、このような状態が広範な面積に及ぶため防除の経済性を低下し、普及性に欠陥を生じる。そこで田植直前に残効

性の長い各ドリ剤を散布することの効果を検討しようとしてこの試験を行つた。

I 試験方法

保温折衷苗代においてヤチコガネを用いて4処理区を設け、これらを3連制とした。1区面積は苗代においては13m²、本田においては約1aとした。

供試薬剤はアルドリソ（15.9%）、アルドリソ（24.0%）、エシドリソ（19.5%）の各乳剤で、それぞれ500倍

の単用とし、対象に無散布区を設けた。

薬剤散布は苗代共同防除の関係もあつて試験対象苗代に5月12日デルドリン500倍加用銅水銀剤液を散布したが、本試験はその9日後に当る5月21日をもつて散布日とし3.3mm²当り約360ccの散布を行った。この散布日は田植えの前日に当たっている。

II 結果並びに考察

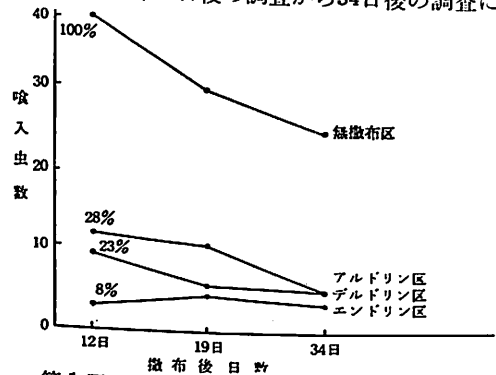
上記方法による調査結果は第1表及び第1図に示す通りである。

第1表 産卵防止効果並びに喰入調査
(1区15株3区平均)

試験区	産卵数(5日後)		食入個体に対する生存率(12日後)			
	3区平均	比	食入合計	生存数	生存率	生存率比
デルドリン区	57ヶ	45%	60	6	10%	32%
アルドリン区	52	41	64	14	14	45
エンドリン区	29	23	48	4	8	26
無散布区	128	100	97	31	31	100

産卵最盛期は田植より田植5日後迄の様であつたが、その後も逐次小数の産卵があつた。これは散布5日後産卵数より12日後喰入数が多いことから示される。また、孵化率は調査しなかつたが観察によると、各区共100%内外と思われ散布区では食入直後の死亡が殆んどであつた。産卵防止効果については第1表でみられるように産卵数の対標準比は23~45%範囲にあり各薬剤散布区ともその効果は認められる。ついで散布12日後において食入個体に対する生存率を見ると、その対標準比は26~45%範囲にあり、食入防止効果も認められる。この場

合、標準とした無散布区は本試験着手前に共同防除のためデルドリンを撒いているので、このことを考えに入ると、散布区の対標準比はさらに下廻つて考えられることとなろう。第1図は各薬剤区における食入幼虫数の消長を示したものであるが、これは産卵防止効果と食入防止の相互的效果が現れたものと考えてよからう。同図が示すように、散布12日後の調査から34日後の調査に至る



第1図 散布後における喰入幼虫数の消長

まで食入幼虫数の漸減傾向をみられるが、これは気象的要因その他の幼虫生育阻害要因が加つた結果と思われる。此の試験結果からすると、田植直前における各ドリン剤の散布は、エンドリン・デルドリン・アルドリンの順に棲息密度低減効果を認めることができるが、実用面からすると、魚毒その他の問題があるので、アルドリン若しくはデルドリンの応用のみが考えられることとなろう。ただし、発生時期・発生消長・薬剤残効期間等については検討を要する点もあるので更にヘブクルール、E P N剤等をも加えて追試した上で確認したい。

ツマグロヨコバイ及びウンカ類に対するセビン剤、DM 剤の効果

常 楽 武 男
(富山県農業試験場)

カーバメイト系新殺虫剤セビン、及びDDTとマラソンの混合剤DM粉剤について、それらの、ツマグロヨコバイならびにウンカ類に対する防除効果を知ろうとし、1959年8~9月において、ポット及び圃場試験の両面から資料を得ようとした。

予備試験 ポット栽培の稲に対して30×100cmよりなる円筒型の金網をかぶせ、1ポット当り約1000頭のツマグロヨコバイを放飼し、これらに対して、第1表に示すような薬剤を散布した。薬剤を均一に撒くため、散布に当つては網全体にビニール袋をかぶせた。散布は9月2日9時40分に行い、散布量は1ポット当り3gとした。

薬剤散布後、時間を追つて虫の状態を観察した結果は第1表の通りである。即ち最も反応の早かつたのはマラ

ソン区で、2時間後に全死となり、次いでDM区が2時間20分後に全死となつた。セビン区は最初反応が遅かつたが、2時間後位から急速に進み、結局DM区と同じく2時間20分後に全供試虫が死に到つた。以上3区よりもやや遅れて5時間20分後にホリドール区が、更に遅れて30時間後頃にDDT区とE P N区が全死となつた。BHC区とディブテレックス区は31時間20分後にも全死に到らなかつた。

この試験における各薬剤の散布量は普通圃場での使用量に比べると約10倍にも当る大量散布であつたから、7~8時間以内に全死に致らなかつた薬剤については実用性はないと考えるべきであろう。

応用試験 8月26日頃出穂した圃場の集団地(栽培